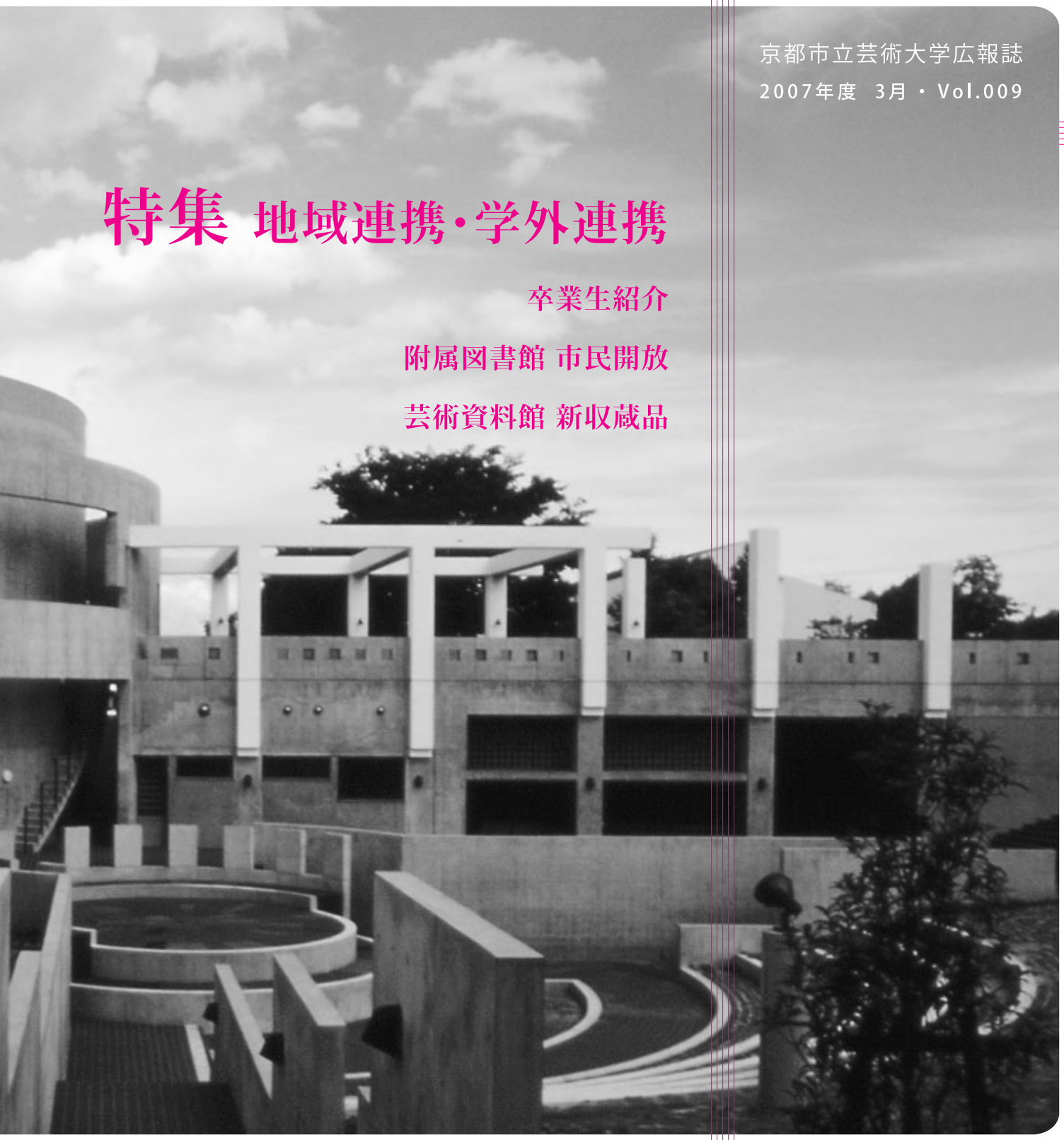
芸大通信.

京都市立芸術大学広報誌
2007年度 3月・Vol.009



特集 地域連携・学外連携

卒業生紹介

附属図書館 市民開放

芸術資料館 新収蔵品

四条ストリート・ギャラリー

学長
潮江 宏三

我が国最古の芸術大学である京都市立芸術大学は、130 年になろうとする歴史の中で市民の皆様の温かいご支援をいただき、15 名もの文化勲章受章者を初め、これまで我が国の美術界をリードする逸材を輩出してきました。何度かの移転で本学は現在、市街地を離れた閑静な西京区大枝沓掛の地にありますが、そこには地元区民の皆様との交流や京都大学桂キャンパスや国際日本文化研究センターとの連携が生まれつつあり、世界や日本の芸術文化の動向に感応しつつ新たな創造が行われる、魅力的な空間が確実に醸成されています。国際交流をしている英国王立美術大学など世界の超一流の芸術大学は、このような本学の実力に一目置いています。そうした教育研究の成果は、年に一度の京都市美術館での作品展において市民の皆様の目に触れることになっていますが、昨年 10 月、四条繁栄会商店街振興組合の皆様方の多大なご助力により、1 日に 3 万人以上もの人々が行き交う京都のメイン・ストリートに「四条ストリート・ギャラリー」としてその一端を展示させていただきました。この催しは、京都市のメインストリートである四条通の烏丸・木屋町間の金融機関等の空間をお借りして、本学の学生５４名による絵画や染織、デザインなど５６作品を１９店舗に展示し、ショッピングや散策で訪れた人々に芸術に親しんでいただいきたいと開催したものです。公立大学ならではの少人数教育と学生諸君の日頃の研鑽の成果を多くの市民の皆様にご覧いただける絶好の機会を与えていただきました。好意的な反応を頂いていることからも、展示された作品が、街の華やぎをいつもと違った風に見せ、行き交う人々に若者が今何を感じ、何を表現しようとしているかを楽しんで感じていただけたと思います。

末尾になりますが、何かとご高配いただきました四条繁栄会商店街振興組合及び四条通りの金融機関・証券会社の関係者各位に改めて感謝申し上げます。

新林小学校 30 周年 記念コンサート出演

大学院 修士課程 声楽専攻　1 回生
溝渕 悠理

扉の向こうから感じられる、たくさんの子どもたちの気配。甲高い騒がしさが懐かしい。私があんなだったのはもう 10 年も前だが、こうして体育館に全校児童が集められた時の不思議な興奮を思い出す。こちらの気持ちまで高められて、足取り軽く体育館に足を踏み入れると、相変わらず騒がしい中から好奇のまなざしが注がれる。

彼らは私たち演奏家に対して優しくはないが意地悪でもない。ノリの良い英語の歌を歌うと、聞き取りやすいリフレインの部分をいつまでも（曲が終わっても）真似してみる。英語なんて意味も分からないだろうに（そんなことないだろうか、今どきの小学生は !?）「英語が良い、英語 !!」と叫ぶ一年生。木下牧子《ひばり》を歌うと、ひばりが力尽きたところでしっかり「死んだ！」とコメント。なんてダイレクトな反応！この至極率直な子どもたちを楽しませたい、彼らの好奇心を満たしたい、という思いが私の中でどんどん高められて、自然と一生懸命になり、そうしていることが楽しくなる。こんなに率直な気持ちにしてくれた子どもたち、ありがとう！彼らにとって私たちの演奏が何らかの刺激となったならとても嬉しく思う。

MR 漆自転車デザイン企画

昨年 12 月 9 日 に、京都府総合見本市会館（パルスプラザ）にて「京都環境フェスティバル 2007」が開催されました。本学が 2005 年より関わっております京都 Neo 西山文化プロジェクトは、本学ビジュアルデザイン研究室・漆工研究室の発案により、３台の MR 漆塗装の電動アシスト付自転車のモデルを企画・制作し、京都大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー（VBL）展示ブース内にて発表いたしました。これらは、株式会社佐藤喜代松商店およびサンスター技研株式会社のご協力のもと実現したものです。耐久性のある MR 漆の紹介を含め、漆ならではのつやと色みを活かしながらも、新しい京都らしさを提案する大変興味深い展示となりました。

なお当プロジェクトは同日、関連企画「第 5 回京都ネオ西山文化フォーラム」を開催し、京都の伝統文化の今後について、および MR 漆の特徴と可能性などについての講演と、京都大学 VBL が力を注いでいる「京都電気自動車 Kyoto-Car 開発プロジェクト」についての紹介やモデルカーの発表も行われました。

今後もこのようなかたちでイベント企画や開発を続けていく予定です。

京都 Neo 西山文化プロジェクトは、京都・西山地区に位置する京都大学桂、国際日本文化研究センター 伝統文化プロジェクト、そして京都市立芸術大学の三機関が連携し、科学技術・文化・芸術が融合した新しい 21 世紀の文化を創出していくことを目的にしています。

京都西山の地が、知性と感性、伝統芸術と先端技術が融合した新しい文化の創造拠点となることが期待されています。

作品寄贈

大学院 修士課程 版画専攻　2 回生
清水 友希

私は京都市立芸術大学で版画を専攻する学生である。これは、近隣である新林小学校の 30 周年記念に、作品を寄贈しに伺った時の話である。

この日、小学校の体育館では文化の集いが催されており、私と共にご同行くださった教授や総務の方々と一緒に、学芸会を鑑賞することができた。私もよく小学生の頃は学芸会をした、自分で企画したものから、任されたものまで、考えて、感じて、精いっぱい作ることを楽しんだ。その頃に描いていた夢を節目がある度思い出すのだ。そう、人前に立ち、鑑賞者を魅了させたい、人に何かを発表したいと強く思った私の原点は、小学校だったかもしれない。初めて訪れる小学校の廊下や掲示板に懐かしさを感じ、そんなことを考えながら、学芸会を鑑賞した後にスピーチする内容を考えていた。

しかし子供達がいる賑やかな体育館に入ると、風圧のような熱気に、そんなスピーチの構想等は吹っ飛んだのだった。その舞台はあまりに大きなエネルギーに溢れ、油断していた私は、思わず「はっと」させられたのだった。現代演劇やパフォーマンスの舞台をみる機会は多けれど、こんなに胸に響く事などそうない。作品 をプレゼントしに来た身が逆にもっと大きな感動をもらうなんて。

その後のスピーチは、その感動をそのまま伝える事を試みたが、今でもなぜそんなに感動したか言葉にするのはとても難しい。しかしそれは「知っていた」と感じたからかもしれない。

私たちは成長するうちいつしか迷い、悩み、行き先を探す。美術でも舞台でも同じだ。何を表現し、なぜ作品を作り続けるか。立ち止まり、原点を思い帰る。夢を描き始めた最初の心の感動や、やりたいと思った事の始まりは何だったか。そうそう、出発はここだった。ここに行こうとしていたのだった。とまた道を進む。迷いを知らない子供達は、いつしか迷い悩む自分の問いの、大事な答えを潜在的に「知っている」からだ。そんな自身の姿を重ね合わせた、出会いと発見がある貴重な経験であった。

演奏旅行

音楽学部　弦楽専攻　3 回生
朴 梨恵

真声会（同窓会）のご協力、資金援助を頂き、先輩方が昔から続けてこられた演奏旅行を今年も無事終える事が出来ましたのでお礼とご報告を致します。

今年は 9 月 18 日から 3 泊 4 日で和歌山県に行ってまいりました。音楽学部の 3 分の 1 にあたる約 80 名が、オーケストラと合唱のメンバーとして参加し、9 つの小・中学校を巡り、合同公演を含め 18 校の皆様に演奏を聴いていただきました。また、一般公演として 9 月 23 日（日）ウェスティで、京都公演を行いました。曲目は、「ウィリアムテル序曲」、「乾杯の歌」、「カルメン組曲」、「軽騎兵序曲」、「ラデツキー行進曲」、「ニュルンベルグのマイスタージンガー」等々。学校公演では、楽器紹介や指揮体験コーナー、ジブリメドレーなどを挟んで、最後に各学校の校歌と「世界にひとつだけの花」をオーケストラ伴奏で歌ってもらい締めくくりました。

昨年度 2 月から、現在 3 回生の実行委員 5 人を中心に企画をはじめました。プロのオーケストラのないところで、距離的にも好ましく、ここ数年訪れていない和歌山県に決め、地域を決めて早速各小中学校、計 600 校に学校公演のお願いの手紙を送りました。当初この活動の認知度が低かったり、趣旨を理解してもらえなかったりと、反応は鈍かったですが、何度かお電話してお話を聞いていただいたところ、公演先として受け入れてくださる学校がちらほら出てきまして、最終的に 9 つの学校から快い返事をいただく事ができました。そこからは、バス・トラックの手配、日程の調整、楽譜の準備、宿舎の手配、参加者を集めること、大学への報告など様々事務的な仕事があり、委員 5 人授業や試験の合間をぬっての作業は、本当に、想像をはるかに超えるハードさでした。先輩方が続けてこられた、この行事。生徒がコンサートを企画・実施するという作業がどれだけ大変か痛感しました。しかし、演奏旅行が実行できたのは実行委員だけでなく、参加者全員が『いい思い出にしたい。いい演奏旅行にしたい』という熱い思いを持ち続けていたからこそです。

実際の演奏旅行は子どもたちに音楽の喜び･楽しみを知ってもらい、クラシックやオーケストラをより身近に感じてもらい、そして、われわれ学生にとってはレパートリーの拡大、短期間での曲の仕上げ、アンサンブル技術の向上、学生同士の団結、といった目的をもって演奏旅行を実施しています。

旅行では、子どもたちの素直な反応や楽しそうな表情を見ることもでき、私どもも演奏をする楽しさや、音楽の素晴らしさを再認識する事ができました。今回公演した数々の学校から、お礼の手紙、児童の感想が寄せられたのですが、「それぞれの楽器を初めて知る事ができた」「音楽が好きになった」「私はいつか○○(楽器) を弾きたい」「また来てほしい、もう一度ききたい」など、とても嬉しい言葉が綴られており、どの公演もとても喜んで頂けたようです。またここ数年、プレゼントとしてオーケストラ伴奏の校歌を録音し各学校にお渡ししているのですが、今年も実施いたしました所、そちらも大変喜んでいただけました。

大学生において、日ごろはオーケストラの授業を人数の関係で乗る事の出来ない下級生の管・打楽器生。彼らのアンサンブル技術の向上はもちろん、弦楽器もアンサンブルをどのようにしていくか、この演奏旅行を通して目的は大きく達成しました。その他、各自おのおのの目的は成す事ができたと思います。

この度の一般公演はウェスティで公演する事が出来たのですが、実は 4 月当初、会場費などもあり、外部での会場が見つからず、大変困っていたのです。そんな折に、ウェスティさん方が声をかけてくださり、ご好意によって公演する事ができました。和歌山県だけでなく、いつも支えて下さっている京都市民の皆様に向けて公演が出来たこと、ホールで弾くという、体育館とはまた違った緊張感をこの演奏旅行のメンバーで感じる事が出来たことはとても意義のあった事だと思います。実行委員で宣伝を大きくした事もあり、当日来場者は約 240 人にものぼりました。(毎日新聞 9 月 15 日朝刊・京都欄地域ニュース第 3 ページに演奏旅行の記事を掲載していただきました)

今回は、このような体制になってから、実質 3 回目の旅行となったのですが、(一昨年は京都のみの公演だった為)、学校や先生方・先輩方、真声会、教育後援会等のご協力のお陰で、ほぼ体制が整い、今年また発展に向け大きく一歩踏み出しました。

学生が自主的に行っている演奏旅行ではありますが、国公立の独立行政法人化が進む中、学校にとっても、知名度を高めたり、地域に貢献するという点でとても有意義な行事になっています。まだまだ解決しなくてはならない問題は多くありますが、公演先での喜びの声を大切に、お互い協力し合って長年続いている伝統をこれからも守っていかなくてはと考えております。

最後になりましたが、毎年快く演奏旅行に協力、資金援助してくださっている真声会、諸先輩の方々に生を代表して心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

今後もご支援、ご指導の程宜しくお願い申し上げます。

祇園囃子の調査と地域

日本伝統音楽研究センター
准教授
田井 竜一

このところ、ほぼ毎年１ヶ所ずつ、京都祇園祭りの祇園囃子の調査をつづけてきている。この稿を執筆するにあたって改めてきづいたのだが、1997年が初年度であったので、今年で丁度10年目になる。当初は、京都府の文化財保護課が実施した京都府民俗芸能緊急調査に参加する形ではじまったのだが、その際は時間的な制約から、詳細な調査報告は四条通りの一番東側からの３ヶ所（長刀鉾・函谷鉾・月鉾）のみとなった。そこで、京都府の調査の終了後も、個人的な形で調査を継続することにしたのである（現在までに、鶏鉾・菊水鉾・北観音山・南観音山・放下鉾の調査が終了）。将来的には、祇園祭りにおいて囃子をはやしている、すべての山・鉾・傘鉾の調査を実施する予定である。

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターに赴任するため、2000年に京都にもどってきてから、この祇園囃子の調査は、地元の人々とより密接な関係をもつ形ですすめられるようになった。祇園囃子というと、宵山や山鉾巡行でのイメージが強いとおもわれる。もちろん、これらは祇園囃子の「本番」であり重要なのだが、録音をおこないつつ囃子をじっくりときいたり、囃子の実際についてうかがったりするには、意外にも適さないのである。

それよりも、二階囃子といって、多くの山鉾では７月１日から約10日間、会所でおこなう囃子の練習期間がある。この期間には囃子の全曲目がはやされるので、囃子に関する様々な事柄について詳しくしるのに、一番良い機会となるのである。私は、毎晩この二階囃子にかよい、囃子の全曲録音や写真をとり、楽器の計測をおこない、囃子方の迷惑にならない程度に、囃子についての話をうかがう。もちろん、宵山や山鉾巡行においても、どの時間・場所でどのような囃子がはやされているか、囃方の間でどのようなやりとりがなされているか等を確認する（特に、山鉾巡行では、山鉾の後ろにあるいてつかせていただいている）。

しかし、これらはまだ調査の序の口である。祇園祭りが完全におわって、担い手の人々がおちつかれる秋口から冬にかけて、今度は囃子方の代表者や、笛方・太鼓方の責任者、長老などの囃子の担い手の方々に、長時間にわたってのインタビューをおこない、囃子についての詳しい事柄をまなんでいくのである。そしてフィールドノートを整理し、その資料をもとに調査報告の草稿を作成する。

それを今度は、囃子方の代表者等のお話をうかがった人々におおくりし、よんでいただく。それらの人々はそれに朱で加筆訂正等をしてくださる。次によんでいただいた皆さんにあつまっていただき、草稿についていろいろと意見をうかがう。多くの場合、それは草稿の加筆訂正の確認にとどまらず、祇園囃子について研究者と担い手が様々な意見を交換する、「シンポジウム」のような場と化す。こうなってくると、担い手の人々は単なる「情報提供者」では無く、「共同作業者」のような立場となってくるのである。

◀ 二階囃子（南観音山）

このような事柄を何回もくりかえしながら、最終的にそれらの成果を調査報告の最終原稿に反映させて完成させ、『日本伝統音楽研究』（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター紀要）に投稿して発表する、というのがこのところの一連の過程となっている。最近、これらの祇園囃子に関する調査報告を、「祇園囃子アーカイブズ」という形で、日本伝統音楽研究センターのホームページの「伝音アーカイブズ」において順次公開している。
（http://jupiter.kcua.ac.jp/jtm/archives/resarc/gionbayashi/index.html）

◀ 囃子の研修会（南観音山）

冊子体の紀要と違って、意外にも多くの人々にご覧いただいているようで、これも調査研究成果の社会への還元の有効な方法の一つとなっている。

私自身、東京生まれ東京育ちで、いわゆる鉾町は縁もゆかりも無い人間である。最初はやや警戒された担い手の人々も、最近はかなりうちとけてくださるようになってきた。ある山鉾では、それこそ新年賀詞交歓会から足洗い（いわゆる打ち上げ）にいたるまでの祇園祭りに関する様々な行事や、囃子の研修会などの囃子方の自主練習会等にも数多く参加させていただいた。このような事は、通常よそ者に対してはありえないことであろう。そうした機会やそれに付随する懇親会でいろいろとうかがえるお話からは、その他の機会では絶対にきくことができない、担い手の人達の本音をしる事が極めて多いのである（もっとも諸般の事情で、それらの全てを調査報告にもりこめるわけでは無いのであるが…）。また、最近では、それぞれの山鉾の囃子方が、自主的な形で、一般社会の人々に囃子をしってもらう様々な活動をされておられる。私自身も可能な限り、そうした活動に協力をするようにこころがけている。

祇園囃子は京都を代表する音楽の一つである。しかしながら、意外なことには、その詳細は今までほとんど調査研究されることは無かった。日本伝統音楽研究センターという、世界で唯一の日本の伝統音楽の研究施設に身をおく者として、地域の担い手の人々に協力していただきながら、その調査研究成果を社会に発信していくことは、ささやかな形の地域連携として大事な事とかんがえている。

田　中　英　行

略　歴

2003 年度　ヴィジュアルデザイン専攻卒業
2006 年度　ヴィジュアルデザイン専攻修了

2002 年
Antenna 結成

2003 年
「NEW-GENERATION 3」
　海岸通ギャラリー CASO（大阪）

2004 年
「KYO-RYU ART PROJECT」那覇商人塾（沖縄）

2005 年
「DOT MOV FESTIVAL 2005」上映
「アジア海洋映画祭イン幕張」
　学生短編ビデオ部門　グランプリ
「デジタルスタジアム」NHKBS2 にて放送
「ジャッピー来臨」個展
　ギャラリー TSCA（千葉）
「取手アートプロジェクト 06」（茨城）
「森で会いましょう」Antenna× ヤノベケンジ
第 2 回現代美術コンクール　受賞作家展（大阪）
「eAT'06 アワード」動画部門　特別賞

2007 年
「第 10 回岡本太郎現代芸術賞」入選（神奈川）
「Videonale11」ボン美術館 (ドイツ)
「Gyeonggi, National Highway No. 1」
　キョンギド美術館 (韓国)
「De NWE Vorst opening exhibition」
　De NWE Vorst（オランダ）

2008 年
「 Art and Capital 」Gallery LOOP (韓国)
「第 11 回岡本太郎現代芸術賞」入選（神奈川）

2007 年度より総合基礎実技の非常勤講師として、大学院修了後も再びこの大学に通う日々が続いています。ちょうど今から 8 年ほど前、右も左も分からぬ無知な学生であった自分が教わったこの授業を今度は自分が教える側となりその場に参加させてもらっている。この少し奇妙な感覚をおぼえる経験は私に運命的なものを感じさせ、様々な記憶を甦らせてくれました。とにかく私にとってこの総合基礎実技というカリキュラムはとても大変重要な意味を持っているのです。

私は 2002 年のまだ学生であった頃に『Antenna』というアートユニットなるものを立ち上げました、その頃の私はデザインの基礎過程にあり、個人で様々な制作を行う中で、一人では出来ない何かもっと多くの人々と共に大きなモノを創り上げてみたい、とただ漠然と考えていたように思います。そしてこのような想いを抱いたのは、やはり過去に経験した総合基礎実技でのグループワークがきっかけとなっていたのだと思います。特に私達が授業を受けた 2000 年度はグループでの制作課題が大変多くあった年でもありました。

私のような想いを持つ同期の友人達と集まり一本のコメディー映画を完成させました。それはただ単純に周囲の人を笑わせたいという単純で明快な動機から作られました、そんな単純な動機がきっかけとなり『Antenna』は活動をスタートしました。その後、メンバーは入れ変わりながら映像、立体、平面作品、インスタレーション、舞台美術、等々様々な領域を横断しつつ様々な活動を行ってきました。ここでも総合基礎で出会った多岐にわたる専攻の仲間がいる事が大きな意味を持っていました。

今年で『Antenna』は活動を開始して 6 年目となります、石の上にも 3 年という言葉がありますが、6 年も一つの事を続けるということは本当に大変な苦労と苦悩がありましたが、それ以上に『Antenna』として行ってきた創作活動において出会った多くの人々、メンバーとして共に闘い去っていった仲間達、苦しい日々の中での様々な経験は、自分たちにとってかけがえのない糧となり財産となりました。 アートに関わる人々にとって、ユニットで行う作品作りはとても奇妙に思えるようで、孤独あってこその表現ではないか、個である事が重要なのではないか、等の意見をしばしばいただく事があります。確かに真に個性的な表現や創作とは個人で行うべきものなのかもしれません、しかし私達は専門的な表現を学ぶ前に芸大に入学して一番始めに知ってしまったのです、友と共に何かを創り上げる喜びを。私はこの知ってしまった喜びと友と共にこれからも『Antenna』として歩んでいけることを願っています。

「日出ズル富士ノ神札念来迎図」 2007 年

「現代御札都市曼荼羅」
2007 年

内藤英治

染織の先輩から「植物をモチーフにした草稿」と「山をモチーフにした白黒の型染作品」を見せてもらった瞬間から、私は「これ」をしたいのだと方向が定まりました。憧れて入ったのは、東山七条にあった美術大学工芸科染織専攻です。当時は、佐野猛夫先生、三浦景生先生をはじめ非常勤の先生方も、染織界の第一線で活躍されている先生方ばかりという、恵まれた環境でした。染織が憧れから現実の実感を伴う事となったのは、2回生時の型染です。糊を置いて染め上げた後の水洗で。たっぷりの水の中で、布から糊が剥がれていくにつれ、くっきりとした絵が布と共に水の中を泳いでいました。手順を踏んでの当たり前の事でしょうが、染めたのだと実感するには十分過ぎる新鮮さと感動でありました。

3回生の時、芸術大学になりましたし、学園紛争もあり、染織の世界では、ファイバーアートが注目を浴び出しました。ファイバーをしなければ現代から置いていかれる、誰しもがそう思うぐらいのインパクトでありました。私も一時期入り込みましたが、自分との違和感を感じ、専攻科入学時から今日まで、型染での制作を続けています。

そもそも、京都芸大の染織教育のあり様を作られたのが、小合友之助、稲垣稔次郎両先生であり、ロウ染をすれば小合先生に、型染をすれば稲垣先生に行き着いてしまうと言われる程の、染色による創作表現の一大方向を具体化されていました。歴代の先生方の元、多くの人材と表現が時代とともに生まれてきています。私の場合は、この大きな存在の稲垣先生の事を、先生方や先輩方から伝説の如く聞いておりましたし、先生の作品の虫干しに寄せていただき、その都度一歩先を歩かれている稲垣作品を発見してしまうのです。

染織による創作活動は、素材と技法と表現が一体となってはじめて出来上がるものであり、その枠組みの中でどれだけ自由に思いを定着出来るかであります。素材である布に、超微粒子の染料を溶かせた水の浸透をどうコントロールするかが鍵となり、そこにロウ染や型染、友禅染、絞り染等の技法との出会いがあり、そこにまた、それぞれが持つ技法の特長と表現に大きな影響を与える制約が潜みます。

型染は、型紙を彫るという工程上、一枚の型紙が“バラバラ”になっては成立せず、描かれる図自体が繋がっていなければならないという大前提の制約があります。そして作図に当たっては、ポジの形とネガの形の中で表現したい事を述べなければなりませんが、むしろこれらの不自由なはずの制約の中に、自分が創造する以上の何かが付加されてくる様にも思われます。

今私が使っている染料、染色法は主に藍染です。藍は天然染料の中でも粒子が粗く、その分、色としての重厚さや力強さ、美しさは勿論、生地白から濃紺に至る藍のグラディエーションも美しく、まさに自然が奏でる美の産物です。藍は浸染でしか染色出来ませんので、細やかな色挿しの仕事ではなく、防染糊を置いた布を藍甕に入れ、その後取り出して空気酸化で発色するという大胆な染色法です。この染色するという行為自体は能動的ですが、浸染する事で、布に染めるというよりも自然に染まっていくという感覚の染色法も、私が藍染を使う理由の一つです。

学生時代から写生と自然を見つめる事の大事さを教わり続けました。自然から発見する形や色の美しさ、不思議さや生命力や取り囲む空気や風等など、あらゆる要素が感動を持って語りかけてきてくれます。この自然が持つ生命力、命、そしてそれらが醸し出す気や気配こそを、型染技法との可能性の中で描き出し「生」を表現出来ればと思っています。

「天上の鏡」（京都府蔵）1996年

「大樹の気」2004年

略　歴

1946　京都市に生まれる
1973　京都市立芸術大学美術専攻科染織専攻修了
1973　夙川学院短期大学非常勤講師に着任
　　後に専任講師となる
1975　成安女子短期大学専任講師に着任
　　（後に成安造形短期大学に校名変更）
　　後に助教授、教授となる
　　この間、教務部長、教学部長を務める
2001　京都市立芸術大学美術学部助教授に着任
2002　教授に昇任
2007　学生部長に就任
現在　日展会友
　　日本新工芸家連盟評議員
　　京都工芸美術作家協会会員
　　日本着物学会会員

展覧会等

1974　個展（通算19回）
1976　日本現代工芸展 現代工芸賞
1980　京展 市長賞（同 ‘82）
1982　京都工芸美術展 優秀賞（同 ‘87、‘92、‘94）
1984　美術選抜展（同 ‘86、‘89、‘90、‘93）
1986　日本新工芸展 会員賞（同 ‘96、‘99）
1991　日展 特選（同 ‘06）
1992　明日をひらく日本新工芸展 大賞
1995　京展 京展賞
2004　日本新工芸展 文部科学大臣賞

朝日現代クラフト展、現代の工芸作家展、
藍の美展、染・清流展、他 招待出品多数
京展、日本新工芸展、他 審査員多数

その他
レクチャー、ワークショップ等多数

三　木　香　代

略　歴

音楽学部音楽学科ピアノ専修卒業

1982 年
第 51 回日本音楽コンクールピアノ部門入選
1985 年
第 11 回ショパン国際ピアノコンクールにて最優秀演奏賞
1987 年
ベルギーのエリザベート王妃国際音楽コンクールピアノ部門入賞
1989 年
第 4 回日本国際音楽コンクールピアノ部門日本人作品最優秀演奏賞
1989 年
第 15 回日本ショパン協会賞を受賞
1990 年
龍野市民文化奨励賞
1991 年
姫路市芸術文化賞芸術年度賞を受賞
2004 年
バンクーバーとシアトルにて当地のショパン協会主催によるリサイタルに出演

現在、国立音楽大学准教授として、大学及び大学院にて後進の指導にあたっている。

私が京都市立芸術大学に在籍していたのは、もう 25 年以上前の話になります。入学当初は音楽学部がまだ平安神宮の隣にあり、途中で今の場所に移転するという、激動の時期でした。おかげで、新旧どちらの学舎も知っている貴重な卒業生というわけです。記憶が薄れてきているというものの、今でもなつかしく思い出されるのは、旧校舎のたたずまいです。門構えからは大学だとは想像も出来ず、中に入れば武徳殿や弓道場など、伝統的な建築物が目を惹く、和のたたずまい。そこで聞こえてくるのは西洋音楽であるという、一種独特の世界が心地よくもありました。しかしそれは、自分のルーツを否が応でも認識させ、そんな自分がなぜ西洋音楽をやるのかという命題をいつも突きつけられているようなものでもあったと思います。

あの頃は、園田高弘先生が中心におられ、先生ご自身が演奏家として身を持って示される高い理想と厳しさが、常に存在していました。新学期には、学年別に課題曲一覧が発表されましたが、それはソロのみならずコンチェルトからピアノ重奏に至るまで広範囲で、ピアノの学生たちにとって指針となるものでした。学内オーディションや火曜コンサートなど人前で弾く機会も多く用意され、活気がありました。私が伴奏やアンサンブルなどを経験し、ともに音楽を作り上げる喜びを知ったのも学生時代です。そして、直接指導を受けていない先生方からも演奏に対するコメントをいただいたり、励ましていただいたりしたことが、今も心に深く残っています。少人数ならではの家庭的な雰 囲気の中で培われた、こわいもの知らず的大らかさは、その後のコンクールなどでもよい方向に作用したのではないかと思っています。

さて、最近の活動報告ですが、2004 年にバンクーバーとシアトルで当地のショパン協会主催のリサイタルに出演させていただいたことはとても嬉しいことでした。また、久々のソロの CD が 12 月 10 日に発売されます。伴奏でも CD の録音が進行中で、こちらは二種類の CD が来春にも発売されるはずです。一方、生のクラシック音楽を聴く機会の少ない地域での演奏活動は、もう 15 年以上継続して行っています。その都度、一期一会という言葉の重みを感じています。

また、現在国立音楽大学で教鞭をとっています。演奏を点数で評価する難しさ、学校教育という枠組みの中で芸術を扱う不条理には悩みますが、本質を忘れまいと絶えず自分に言い聞かせています。

あの入学式の日に、当時の学長であった梅原猛先生が、芸術家にとって大切なものとしておっしゃった、「ナイーブな心」という言葉は、今でも私の脳裏に焼き付いています。教育する側となった今、一番心にとどめておくべき言葉かも知れません。

上　野　洋　子

京都芸大（沓掛）の思い出

高校時代から数えて 9 年間を私は沓掛で過ごした。四季ごとに顔を変える山の緑やあちこちの柿、冬の冷たい空気、体力がないと辛い芸大正門の坂と階段、図書館の匂い。そして同じ大学内なのに全く違う美術学部の存在、彼らの制作や生き方は音楽科とは全く違ったスタイルで非常に刺激を受けた。

私はもともとかなり怠惰な人間なので、どっぷり声楽にひたることが出来ず喉や頭よりも感覚ばかりで生きていた。良くも悪くも未だその生き方は変えられないでいるが！おまけに時として先生方から賛否両論の芸祭は大騒ぎが嬉しくて毎年存分に楽しんでいた。したがって沓掛の柿も含め私にとっては「秋」が非常に思い出深い！

年間を通しては少人数制で組まれる音楽学部のカリキュラムが私には大きな助けになったと思っている、これが声楽だけで 100 人の学生であふれていたら、散々落ちこぼれて演奏でお給料を頂く今の人生などあり得なかった。本格的に自覚らしきものが芽生えたのは大学院からで、知識豊かな先生方と熱心な同期に囲まれてこの 2 年間は専門に十分集中出来る環境だった。そして密度濃く専門的に学ぶほど留学の大切さも痛感したのだった。

オペラ座での生活

痛感の結果、なんとか私はウィーンへ渡り 3 年間の留学生活は実現した、更に勢いで卒業を待たずにオペラ座の合唱団員のオーディションも受けた。正式団員、しかし同じ時期メゾ・ソプラノとして学生だったのが「高音、きれいネ」で第一ソプラノとしての採用である。歌うことで定職を持ちたいという夢は実現したがとんでもない展開となった。

ウィーン国立オペラ座の今シーズン 1 年間のレパートリーはオペラのみで 49 作品、本番回数 231 公演、そして私のレパートリーは勤務 7 年目で現在 68 作品。毎晩違う衣装をつけカツラをかぶり、ソリストの後ろで歌い演じ時には踊るが、午前中は 1 時間半の音楽稽古又は 3 時間の舞台稽古へ出かけ、休憩後夕方からは日によって 1 時間音楽稽古、その 30 分後に慌しく開演・・・かと思えば半日オフの日もあり非常に不規則だ。（貴重な休憩中はと言うと、たくさんの同僚が昼寝をする間私はカフェへ・・・せっかくのウィーンだ！）プレミエ間近になると衣装付き舞台稽古が缶詰状態で 5 時間近く続きさすがにクタクタ、『アイーダ』や『オテロ』などの大合唱では力の全てを使い果たし、次の日の 9 時 15 分出勤の時など脳みそがまだ普通に起動していない状態で口だけがとりあえずパクパク動いていたりする。

7、8 月のシーズンオフの 2 ヶ月間は私たち合唱団員は自主参加でザルツブルグ音楽祭でもオペラ数本とコンサートを歌う。したがって一年間のうち 10 ヶ月をウィーン、2 ヶ月をこのザルツブルグで過ごしている。華やかさ、斬新奇抜な演出、演奏家も聴衆もどことなくウィーンとは違う空気をかもし出し毎回興味深い。そして自由時間がウィーンよりも多いここでの仕事は、休みがあればやれフッシュル湖だ、ゲトライデ通りへショッピングだ！とリフレッシュ出来るので当分はこれを省いての生活は考えられない。

留学したての頃「合唱の仕事は使い捨て」と聞いたことがある。喉の消耗、膨大な暗譜と本番の量、他国民の中での自己確立、非常に過酷な環境だ。しかし、今の仕事場では使い捨てられたとしても必ず這い上がってくるだけの根性と強さも同時に養われる、そんな気がするのだ。そしてその強さは音楽家には必須である。更に素晴らしい音楽、最高級の演奏家、その「本物」に触れた時、頭の中に一瞬たりとも日常生活のストレスがよぎることはない、まさに今の私は「音楽」に日常そのものを支えられている。

ヴェルディ「仮面舞踏会」第三幕の衣裳（本人右端）

略　歴

京都市生まれ
音楽学部卒業・同大学院修了

メゾ・ソプラノとしてオペラではカヴァッリ「オルミンド」のミリンダ，宗教曲ではロッシーニ「スタバト・マーテル」，バッハ「ヨハネ受難曲」，ヘンデル「メサイヤ」などのソリストとして出演した他，「堀川高等学校卒業生 8 人によるチャリティーコンサート」やムジカ工房主催「阪神大震災救援コンサート」（正木真理氏とのジョイントコンサート），「新進演奏家の夕」などに出演。大学院修了後，京都明徳高等学校にて 1 年間非常勤講師として勤務。
1998 年ウィーン国立音楽大学リート・オラトリオ科入学，2001 年 6 月卒業。
同年 5 月から第一ソプラノとしてウィーン国立オペラ座の正式合唱団に入団，現在に至る。
ウィーン在住。

平成 7 年度友愛ドイツリートコンクール入選，第 5 回日本シューベルト協会国際歌曲コンクール入選，第 9 回和歌山音楽コンクール奨励賞，第２回ＫＯＢＥ国際学生音楽コンクールタカハシパール賞，第 34 回なにわ音楽祭「新進音楽家競演会」新人奨励賞。2001 年ウィーンにてリーダーアーベント。2007 年ザルツブルグ音楽祭でウェーバー「魔弾の射手」にて花嫁付添いの乙女の一人を務める。
正木真理，三井ツヤ子，ワルターモーア，ミハエラ・ウングレアヌ，ハイディ・ブルンナーの各氏に師事。マスタークラスでは故ハンス・ホッター，キース・エンゲン，エリー・アメリング，ヘルムート・ドイチュなどに師事。

市民開放のご案内

京都市立芸術大学
附属図書館・芸術資料館事務室
事務長
大橋 明

京都市立芸術大学では、地域貢献に資する新たな取組みとして、芸術に関する調査研究を目的とされる方々に広く利用していただくため、平成 19 年 9 月 3 日（月）から、附属図書館の市民開放を実施しています。

京都市内に在住又は通勤されている満 18 歳以上の方への施設の開放と所蔵情報のインターネット公開がその内容ですが、附属図書館の所蔵する約 10 万 3 千冊の芸術に関する図書・雑誌・図録・楽譜などを手にとってご覧いただけるようになりました。

閲覧の他にも、附属図書館の所蔵する CD やレコードなどを視聴覚室で聴いていただいたり、興味が湧いた楽譜を試奏室のピアノで弾いていただくこともできます。

さて、当図書館の特徴ですが、元来が芸術大学の附属図書館ですから、芸術関係の専門書が多いと言うことが何よりの特徴です。

蔵書の構成は、美術関係が 4 割、音楽関係が 2 割、その他一般が 4 割となっています。

美術関係では、大型の絵画集や各種展覧会の図録、デザイン書などが豊富に揃っています。中には、明治 13 年に創設された学校のことですから、江戸時代に日本や中国で発行された和綴じ本もあります。

音楽関係では、クラッシック音楽を中心とする楽譜や解説書と CD・レコード・レーザーディスクなどが揃っています。同じ曲でも出版社や出版年の違う楽譜があり、微妙な表現の違いを発見できるかもしれません。

この他にも、全国各地の大学紀要や美術館・博物館等の年報などが揃っています。

閲覧室には約 2 万 6 千冊を配架していますが、書庫にある蔵書も、館内にある図書検索機（OPAC（オーパック））で調べることができ、カウンターへお申し出いただければ書庫からお持ちします。

貸出はしておりませんが、座席が 106 席ある閲覧室や 12 ブースある視聴覚室などで、見たり聴いたりしていただけます。

また、著作権法の範囲内でコピーしていただくこともできます。

利用は、平日（月～金曜日、ただし、定期試験中、学休期間、館内整理日を除く。）の午前 9 時から午後 5 時までです。

運転免許証など氏名と住所等が確認できるものをお持ちいただき、カウンターで利用申込書をお書きいただけば入館できます。

詳しくは、ホームページ（http://www.kcua.ac.jp/library/）でご案内しておりますので、開館カレンダーと合わせてご覧下さい。

京都の市中には、平安京以来の芸術文化の土壌があり、芸術に関心をお持ちの方がたくさんおられると思います。ぜひ一度、当図書館をご利用いただければ幸いです。

「後期展」と新収蔵品

京都市立芸術大学
附属図書館・芸術資料館事務室
統括主任（学芸員）
松尾 芳樹

「後期展」では、平成 18 年度の新収蔵品を中心に、本館の所蔵する古美術・近現代美術・素描を展示した。今年度の収蔵品展から変わったことといえば、新旧諸分野を意識的にとりまぜて展示する方法に変更したことである。いろいろなご意見はいただいているが、概ね好評であり、展示する側にとっても、優れた価値を有しながら孤立しがちだった資料が、容易に公開できる長所を感じている。その効果もあって、今回の展示では、芸術資料館開設以後初めて展示する旧蔵資料を含めることができた。

新収蔵品についていえば、平成 18 年度は参考品 46 件、卒業作品 5 件が新たに収蔵された。富樫実氏・三輪晃久氏・入江酉一郎氏・藤平伸氏・橋本明子氏・中原史雄氏・加藤明子氏ら、本学卒業生をはじめとする京都の美術家の方々からご自作を多数ご寄付いただいたことや、吉村勲・星野空外・西嶋武司・三輪晁勢・猪田青以の作品をご遺族らからご寄付いただいたことにより、既存のコレクションが大きな充実を得ることができた。本館活動への皆様の心強い支援の結果である。

新たに収蔵された参考品の大半は寄付されたものだが、幸い鈴木百年《三国志演義図》、谷口香嶠《孔明望風図》の 2 点を購入することができた。ともに中国の『三国志演義』に画題をとり、本学前身の旧教員によって描かれた作品である。

学校の歴史に関わる作家の作品を収集することは、本館収集方針の要のひとつである。中でも、旧教員の作品は、その必要性に比して収蔵が圧倒的に少ないため、収集の重点課題と感じている。

鈴木百年（1828－1891）は、京都に生まれ、諸家を折衷して一家をなした画家である。『平安人物志』に早くから名を連ね、穏健な画風で幅広い画題をこなし、幕末明治期の京都画壇で大きな勢力を示した鈴木派の基礎を作っている。明治 13 年 (1880) 京都府画学校の開設に際しては、北宗三等教員をつとめた。一方、谷口香嶠（1864－1915）は現大阪府和泉市に生まれ、本名を槌之助といった。幸野楳嶺に入門し、竹内栖鳳らとともに門下四天王の一人と称され、史書故実に通じて歴史画に優れた。同 26 年 (1893) 京都市立美術工芸学校教諭となり、同 42 年 (1909) から同絵画専門学校教諭を兼任している。

本館の収蔵品について、しばしば誤解を受けているのは、学校が長い歴史を持つため、その教員の作品も、歴史に比例して残されているかに思われていることである。残念ながら教員の作品が寄付されるようになるのは、昭和 37 年に今熊野校地に陳列館が開設されて以後のことで、それ以前は，教員による本画等の作品寄贈は例外的なものであった。

従って、現在の学校に残される教員作品は概ね美術大学以後の教員のものである。画学校時代の出仕をはじめとする、草創期の教員はもとより、絵手本や習作を除けば、美術工芸学校や絵画専門学校の教員の作品すら学校には、ほとんど残されていない。

学校に図書館しかない時代であることを考慮すれば、教育資料として本画等の作品を寄付することがなじまない当時の状況は理解されるのだが、現代から学校の歩みを作品で振り返ろうとしたとき、明治 27 年以後継続的に収集されている学生の卒業作品に対する、教員作品の一群が形成されないのは、いかにも不都合がある。

こうした状況を踏まえて、機会を捉えては，寄付や購入により、旧教員の作品の収集につとめている。ただし、購入予算は乏しく、なかなか思ったような成果は得られない。歯がゆいことは多いが、これからもこの方面の寄付の申し出に期待するほかない。

鈴木百年 《三国志演義図》

谷口香嶠 《孔明望風図》

2008年 前期　イベントスケジュール

●4月25日（金）　～7月27日（日）
平成20年度京都市立芸術大学
芸術資料館収蔵品展「前期展」
▶京都市立芸術大学芸術資料館陳列室

●5月8日（木）
伝音セミナー
～日本の希少音楽資源に触れる - ＳＰ盤にきく幻の音～
「明治大正期の能の名手たち - 謡と鼓を中心に」
▶京都市立芸術大学 新研究棟

●5月11日（日）
京大時計台記念館コンサートシリーズ1
▶京都大学百周年時計台記念館　百周年記念ホール

●5月22日（木）～25日（日）
四芸祭
▶金沢美術工芸大学

●5月31日（土）
平成20年度第1回公開講座
「祇園祭り　鶏鉾の囃子」
▶京都芸術センター フリースペース

●6月5日（木）
伝音セミナー
～日本の希少音楽資源に触れる - ＳＰ盤にきく幻の音～
「花街のうたを聴く - 近代日本の女性ボーカリストたち」
▶京都市立芸術大学 新研究棟

●6月7日（土）
京都国立近代美術館ホワイエコンサートシリーズ1
サマーナイトコンサート
▶京都市立芸術大学 新研究棟京都国立近代美術館ホワイエ

●6月11日（水）
第22回ピアノフェスティバル
▶京都市立芸術大学 新研究棟京都府立市民ホールアルティ

●6月28日（土）
ウエスティ「音暦」
▶京都市西文化会館　ウエスティ

●7月3日（木）
伝音セミナー
～日本の希少音楽資源に触れる - ＳＰ盤にきく幻の音～
「祭礼囃子のSPをきく」
▶京都市立芸術大学 新研究棟

●7月6日（日）
第129回定期演奏会
▶京都コンサートホール・大ホール

発行元：京都市立芸術大学全学広報委員会
〒610-0098 京都市西京区大枝沓掛町13-6
TEL 075-334-2200

京都市印刷物第193215号

時を超え 美しく
ひと輝く歴史都市・京都